

釣れ釣れなるままに

2015年思い出の釣行記 PART. 8

アナゴ釣り

鹿島釣狂

土用波の洗礼

娘夫婦が孫を連れて我が家に1週間滞在した。娘夫婦が帰ったその晩に39度を超える熱が出た。孫が罹っていた風邪をもらったらしい。孫と遊んでいるときに、鼻先に何度もクシャミの洗礼を受けていたのだ。釣りに出掛けたいが1週間、大事をとることになった。

前野氏から電話が掛かってきた。浜厚真漁港でのアナゴ釣りのお誘いだった。釣りの準備をしていると、またまた熱が出てきた。病院では肺炎の恐れがあるのでしばらく安静にすることと念を押された。その日、前野氏は手の平級のクロガシラを何枚も釣り上げ、その中には40cm級のものも混ざったらしい。前野氏よりも先端にいた人は、アナゴも2本釣り上げたということだ。

8月22日、居ても立ってもいられなくなった。まだ鼻水がグチュグチュしているが出掛けることにした。冷蔵庫から塩イソメを取り出しているときに、女房に「また、釣りに行くんですか？」と呆れた顔で問いかけられた。「余ったイソメに塩をして丁度上手い具合に仕上がったから入れとくだけだ」と言い訳をしたが、この冷蔵庫に保管している塩イソメこそが、女房にすれば厄介者なのだ。「このイソメを使い切るために、やっぱり釣りに行くことにする。」と言い直した。準備は整っているのだ。

午後3時に浜厚真漁港に向かっていた。漁港内には誰もいない。少し後からやって来た3名が防波堤先端に車で向かってきて、私を追い越していった。彼らは、先端ではなくその手前の広いスペースに駐車して釣り場を設定した。私は、先端で三脚をセットして、3本の竿を次々と振り込んだ。向かいの外防波堤には、ドドーンという音とともに大きな波が打ち寄せて高々と波飛沫を上げていた。

すぐに竿先がグイーンと突っ込んだ。慌てて上げると、幅が25cmほどもある昆布がハりに絡みついてきた。よく見ると、幅広昆布が海面一面に渦を巻きながら漂っている。それが海底の方に潜りこんだり、浮かび上がってきたりしているのだ。もう1本の竿を上げたがこれは大物だった。何本もの昆布が絡みつき竿の力だけでは引き上げることが出来ない。用意したタモでその昆布を引き上げることになった。3本目の竿が三脚から離れて海中を目指して突っ込んでいった。竿先が海面に向けてぶら下がった。これもキリキリと巻き上げている最中に道糸が切れてしまった。3本の竿を上げて途方に暮れて先行者の様子を伺った。私と同じような有様だった。彼らはお互いに協力して用意したギャフに昆布を引っかけて取り込んでいる。竿を上げる度に昆布が絡まっているのだ。

港の中の方に移動した。しかし、結果は同じだった。昆布が漁港内の海底一面に敷き詰めるように覆っているのだ。それでも先端よりはマシだった。先客が引き上げ、替わりに4名の釣り人が防波堤先端で竿を出した。結果は同じだったらしくすぐに引き上げてきた。

雨が降ってきた。合羽を取りに車に戻って、再び釣り場に立つと、3本の竿とも悲惨な状況だった。ザーザー降りの雨の中、私も引き上げることとなってしまった。

ここ何回か釣果0の日が続いた。女房がそんなに釣れないのにどうして行く気になるの？それも今日みたいに病み上がりの身で、雨、風、波、昆布と向かい合わなければならぬと問いかける。私が釣れない理由を上げながらあれこれと話したのを聞き逃さなかったようだ。

私も、嘘ではないのだが、釣れない自分の言い訳の言葉に空々しさを感じた。言葉にすると、どうして心が逃げていくのか。たぶん自分は、釣りに関わっていただけなのだろうと思った。何度、釣果無しに打ち拉がれようが、釣りが今の私にできる最大の喜びなのだ。もし自分から釣りをとったら何が残るのだろうか。何も残らない。自分は糸の切れた凧のようにどこかへ漂い流されて行ってしまふのだろう。

いちいち他人に説明できるような動機づけをしているわけではない。今日、釣りに行かなかったとしたら、この大きな喜びを味わうことは出来なかったかも知れない。万が一釣れたとして……。今日でなければならなかったのだ。

次ぎの日の朝刊に新ひだか町の海岸に築かれたばかりの防潮堤が破壊されたと記事に載った。写真付きである。浜厚真漁港の外防波堤に打ち寄せていた高波と同じものが新ひだか町の海岸に打ち寄せ、壊したのだと告げている。2段構えの構造にになった防潮堤である。南の海上で発生した台風16号が起こしたうねりが遙か北海道の海岸に高潮となって打ち寄せたのであった。

高波が日高管内の海岸に打ち寄せたニュースは北海道新聞に次のように報道された。

太平洋を北東に進む台風16号の影響で道内は24日も、太平洋沿岸にうねりを伴う高波が押し寄せた。25日にかけて太平洋側の波の高さは5メートルとなる見通しで、札幌管区気象台は警戒を呼びかけている。

高波の影響で海岸の護岸が22日、約30メートルにわたって決壊した日高管内新ひだか町静内春立では、近くの春立生活センターに自主避難していた4世帯7人が、24日朝に全員帰宅した。

決壊した現場では室蘭建設管理部が、護岸と民家との間に消波ブロックを設置するなどの応急対策を講じている。現場から約100メートル山側には、不通が続くJR日高線があるが、国道や住宅をはさんだ高台にあり、線路への影響はないとみられる。

日高管内新ひだか町で8月22日、海岸の護岸が決壊したのは、南に約2千キロ離れた太平洋上の台風16号の強風で発生した波が大きくなうねりとなって押し寄せた「土用波（どようなみ）」が原因とみられることが24日、札幌管区気象台などへの取材で分かった。室蘭建設管理部によると、決壊幅は約90メートルに及んでおり、復旧の見通しは立っていない。

同気象台によると、台風を発生源とする土用波はこの季節に時折発生する。22日の日高管内は、風は穏やかだったが、波の高さは新ひだか町に近い様似町の観測地点で最大3.8メートルを記録した。



新ひだか町の災害現場（ネット画像より）



土砂の流失を防ぐための応急工事（ネット画像より）

法螺か真実か

この時期釣りものはない。しかし、菅原隆氏が苫小牧東港「ハモ上昇の手応え」と題した記事を載せた。8月20日、中央水路でハモが2人で5匹の釣果があったというものがある。菅原氏がフルキャストというのだから私にはとうてい届かない距離なのだろう。

9月1日、波・風とも穏やかなようだ。その記事に一縷の望みを託して出掛けることにした。さて、前回の浜厚真漁港ではひどい目にあった。漁港内に幅広昆布が敷き詰められたように入り込んでいたのだ。そのリベンジをしようかと思うが、まだその昆布が港から出て行っていないことも考えられる。苫小牧西港南埠頭に向かうことにした。

南埠頭ではテロ対策柵の横でサビキ釣りの人たちが並んでいた。皆さんサバを狙っているようだ。7番と8番の係留杭のところ为空いていたのでそこに陣取った。自転車でやって来ていたハモ狙いの釣り人に様子を伺うと、ほとんど釣れていないということだ。まあ、見込がないのかなと思いながらも竿を出す。

暗くなるまでは、クロガシラを狙って25号竿2本、30号竿2本にカレイ仕掛を付けて遠投した。そのうちの1本はコマセカゴにアミを入れておいた。そのコマセカゴの仕掛にピョコン、ピョコンとアタリが出て、手の平に満たないようなクロガシラが釣れた。また、同じようなアタリで同じようなクロガシラが釣れた。こんな小さなカレイでもハリをしっかりと呑み込んでいる。

ポツリ、ポツリと釣り人が帰っていった。午後6時、薄暗くなり始めたので、カレイ仕

掛からアナゴ仕掛に取り替え、その仕掛の全てにルミコのレッドとグリーンを付けた。おにぎりを搔っ込んでいると、右の30号の竿先が右に動いた。引き潮で25号ナマリが流されているのかなと30号ナマリに替えようとしていると更に竿が動いた。隣の人が竿にアタリが出ているのではないかと言う。よく見ると横に動いた竿に微妙なフワフワというアタリが出ていた。竿を手を持ち、グクッと来たところで合わせを入れる。乗った。アナゴ独特の軽くなったり、ググッと刺さり込んだりの手応えを感じながら、アナゴと確信していると、やはり海面に浮いた魚はその長いものだった。



今年の初アナゴ

首筋にナイフを入れて、買い物袋に入れてから用意してきたクーラーに収めた。そしてすぐ私の右隣の地元の人にも同じようなアナゴが釣れた。右隣りと入れ替わるように新たな釣り人が入り、素晴らしい遠投力で竿を振っていた。午後10時ころに2本目がきた。45cmほどのものだった。右隣は、そのぐらいが美味しいのだと言ってくれた。

彼と話している最中に港の沖合を独航船が通りかかった。彼は、慌てて自分の竿に駆け寄った。道糸が独航船に引っ張られるのではないかと……。それほどの遠投力なのだ。私はそんな心配したことはない。そもそもそんな遠くに私の道糸はないからだ。彼は言った。

「4年ほど前の11月の冷え込んだ日に、西埠頭のへの字でアナゴを掛けた。居眠りしていたのでアタリは見えていない。船が入るのでどけてくれと言われて、リールを巻いている

となにやら凄く重い。根掛かりかなと思ったが、うごめく感じが伝わってくる。渾身の力を振り絞ってリールを巻いていると考えられないような大物だった。それでもゴボウ抜きした。そのアナゴは103cmあった。手を出すのが気持ち悪いような恐ろしいような気がした。」

「良かったですね。そんな大物を一度でいいから釣ってみたいものです。でも、アタリを見られなかったのが残念でしたね。食べきれる量ではなかったでしょう。」

「美味しいものではなかった。昨日、入舟埠頭でアナゴを一人で9本釣った人がいた。」

「あそこは随分遠投しないと釣れないのでしょうか？」

「いや、80～100m程の距離で投げている。自分は竿1本で200m程投げたから、少しずつサビキながらアタリをとっていた。餌だけとられて自分にはアナゴが釣れなかった。木材埠頭もアナゴの大物が釣れる場所なのだが、たき火をした釣り人が居たので、立入禁止になっている。」

200mという言葉に疑問を抱いたが、そのまま話を伺った。

「釣りの相棒が脳溢血に当たってしまった。足に麻痺が残っていたので、自分が釣り場に案内することになった。今までのような陰しいところは行けないので、車を横付けして竿を簡単に出せる所を選んでいる。元気だった時の彼が秘密にしていた釣り場があった。いつも大物の真ガレイを釣り上げてきていたのだ。恵比須屋釣具店で彼の動向を聞いても、場所だけは教えてくれないというものだった。彼の話の端々から、噴火湾のある場所を特定した。そして、今年の7月には4週続けてそこに入るようになった。」

その時の釣果が凄かった。1週目は58枚。40cm以下はリリースしてもだ。イソメの2千円分を使ってしまって、地元の釣具店で2千円分を追加した。次の週ははじめから4千円分のイソメを用意していった。真ガレイが62枚だった。3、4週目こそ数は落ちたが似たような釣果だった。」

「テトラを乗り越えての釣りになるのでしょうか？それに遠投しなければならないのでしょうか？さらに、そんな夢のような場所には釣り人が混んでいたのでしょうか？」

「テトラはない。私の隣にいた小学生がポチョンと投げた竿にもアタリが出て、大きな真ガレイを釣り上げた。シャケの時期はさすがに混むと思うが、7月は閑散としていた。大きいもので真ガレイが58cm、タカノハでは64cm、ほとんどが真ガレイで、たまに砂ガレイとイシモチが混ざるくらいだ。」

このあたりになってくると全てが法螺話のようにも聞こえてきた。「うんうん。すごいねえ。」と相槌をうちながらも半信半疑なのである。

「有珠海水浴場もよく釣れた。サケ釣りにもよく行く。錦岡はいまだに混雑していて、ロープで縄張りをしている。ケンカが絶えないので俺は近づかないようにしているのだが・・・。」と頬に傷を付ける仕草をしてから話し終えた。

濃い紫の夜の空を仰ぐと、笠を被っていた月の雲が流れて、餅を突く兎（蟹だろうか？）の姿が見えるようになった。午後11時ころに3本目がきた。60cm弱のものだった。隣

も帰ってしまって釣り人は誰もいなくなったので、私も片付けて帰宅した。



本日の釣果

次の日の朝、起き出していくと女房が恐怖で引きつった顔を向けてきた。「貴方がまだ釣りから帰ってきておらず、2階では誰も居ないと思っていたのに、ゴトゴトと音がするので気味が悪くなった。」というものだった。

夕飯は女房を驚かせた罪滅ぼしにアナゴの蒲焼きに挑戦した。魚焼きコンロとオーブンで試してみた。コンロの方は身が縮まってきたのに対して、オーブンの方は蒸したようにふんわりして縮まり方もそうでもない。照りも出て上手い具合に仕上がった。さて味の方はどうだろうか。女房は美味しいと言ってくれるが、息子は今一の反応だ。息子が山椒を掛けた。グッと味が引き締まって、味わいが全く別物に変身した。この次は煮穴子に挑戦してみよう。



アナゴ丼の出来上がり